



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/594/



エリア

宜蘭県

テーマ

歴史

交通

自然

産業

食文化

南方澳漁港

日本に一番近い台湾の港町で、 海鮮料理の食材に触れる

南方澳の中心部にある南天宮に上がり、テラスから外を眺めてみましょう。大小の漁船が港を出入りする様子が眼に入るはず。周囲の往来も活発で、行楽客を乗せた大型バスが行き交っているかもしれません。南方澳は台湾有数の港町のひとつで、海鮮料理に欠かせない食材を供給しています。南天宮のテラスから見える港は、日本統治期の1923年に整備されたものです。その翌年には台北方面とを結ぶ鉄道が整備され、漁獲物の輸送体制が強化されました。こうした機能の強化をきっかけとして、内地から多数の漁業従事者が出入りするようになるのです。南方澳は、台湾島の中で最も日本に近い場所で、日本の最西端である与那国島（沖縄県）とは100キロ余りしか離れていません。このため、日本統治期には多数の沖縄漁民が活動したほか、南方澳から台湾に上陸して、進学や就業のために台北などの都市部に向かう人もいました。第二次世界大戦後は、台湾で暮らしていた沖縄出身者や戦時中に台湾へ疎開していた沖縄出身者の引揚港としての役割を果たしていました。

学びのポイント

1.

どのような漁が行われていますか？

港を歩いてみると、さまざまな漁具が並べられ、漁船の形も一様ではないことに気付くでしょう。船首から台が突き出ている漁船は、カジキを捕る漁法の「突き棒（つきんぼう）漁」を行うためのものです。日本統治期に内地からもたらされたもので、船首の台に船員が立ち、海を泳ぐカジキに直接モリを打って仕留めるのです。

2.

南方澳はどのように発展していったのですか？

1920年代に鉄道の開通や市場の開設などが相次ぎ、台北など都市部での水産物の需要に応えられるようになったことで、南方澳の重要性が高まっていきます。第二次世界大戦後は港の拡張も行われています。最近では、2006年に延長12.9キロメートルの雪山トンネルが開通したことにより、バスやマイカーでの行き来も盛んになりました。人口500万を超える台北圏と1時間超で結ばれたことで、南方澳は行楽地として注目度が上がり、大消費地に水産物を供給する役割もより重要になりました。

3.

日本統治が終わると、南方澳と日本の往来はとぎれたのでしょうか。

沖縄とは近く、また、日本統治期に沖縄と南方澳を結ぶ航海ルートが定着していたため、戦後もしばらくの間は人々の行き来が続きました。「密貿易」とも呼ばれる私貿易も盛んに行われました。こうした貿易によって沖縄を含む日本での物不足を補っていたという側面もあります。沖縄の漁民たちは1960年代まで南方澳付近で漁を続けました。